

4. 3. 1

佐倉市

教育センターだより Vol.56

令和4年3月1日発行／佐倉市教育センター／TEL. 043(486) 2400 http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/13-6-0-0_6.html

今こそ、個別最適な支援を

佐倉市教育センター所長 佐藤 克巳

「この冬一番の寒さ」や「真冬並みの寒さ」といった言葉が、天気予報で繰り返し使われ、1月6日と2月11日に4年ぶりのまとまった積雪を記録しました。そんな厳しい寒さに見舞われた冬も、ようやく終わりを告げ、暖かな春の訪れを迎えるとしています。

さて、新型コロナウィルス感染拡大防止のため、令和元年度は年度末に1ヶ月程度、令和2年度は年度始めに2か月程度の一斉休校が、それぞれ実施されました。3回の「緊急事態宣言」や2回目が適用中の「まん延防止等重点措置」等、2年にわたる対応をもってしても、未だ新型コロナウィルスの感染収束の気配は見えてきません。それどころか、今年に入り、オミクロン株による、これまでにない感染急拡大の波が押し寄せる中、様々な制約（下図参照）下での学校教育活動を余儀なくされている状況が続いているです。

この間、学校生活のみならず、子どもや保護者を取り巻く社会生活や家庭生活にも様々な影響（日常生活のリズムやペースの乱れ、我慢を強いられるなどの増加等）を及ぼし、子どもの姿や家庭の様子の「変化」を目にする機会が多くなったのではないでしょうか。

- ・一斉休校・分散登校
- ・マスク着用
- ・手洗い、手指消毒
- ・換気、黙食
- ・調理実習の中止
- ・合唱活動の制限
- ・グループ活動、教え合い（話し合い）活動の制限
- ・行事の中止や縮小
- ・部活動の機会減少 等々

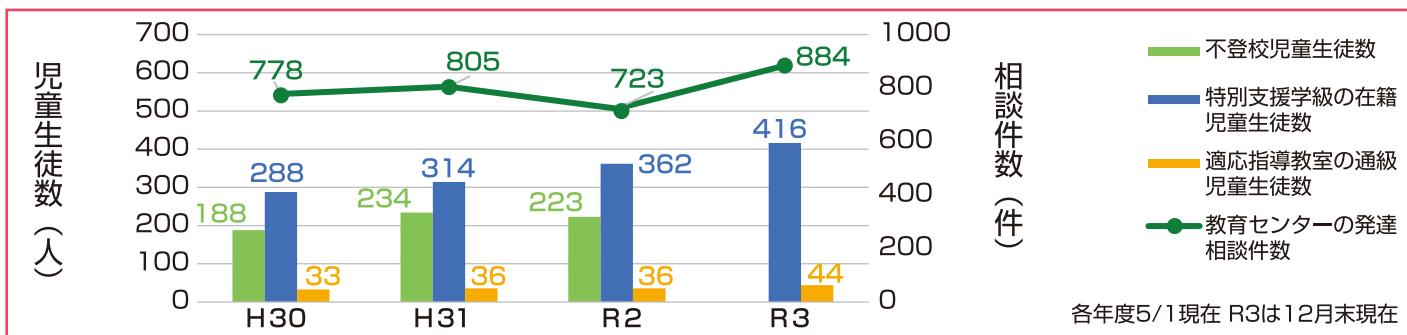
- 学校生活や家庭生活のリズム・ペースの乱れ
- 我慢や不自由を強いられる機会の増加

志津適応指導教室では…

●制作活動や調理実習、校外学習の中止で、何気ない仲間とのコミュニケーションや通級意欲が減退した。

教育センターへの相談内容では…

●保護者の在宅勤務が増加し、自主的に学習できない子どもの姿が見て不安になり、強くあたってしまい、関係が悪化した。
 ●学校を訪れる機会や、先生方と会話する機会が減ったことで、校内の子どもの様子が見えにくくなり、先生への相談等もしにくくなった。



学校では、特別支援学級・通常級を問わず、障害やつまずき、悩みからくる様々な「困り感」を抱えながら、学校生活や日常生活を送っている多くの子どもたちやその保護者に対し、先生方が真摯に向き合い、対応しているところです。

そのような中、ここ4年間の佐倉市内における不登校児童生徒数、特別支援学級の在籍児童生徒数、教育センターにおける発達相談件数、適応指導教室の通級児童生徒数は、グラフのとおり、いずれも増加傾向を示しています。（令和3年度の不登校児童生徒数は、昨年末時点で令和2年度の数より、約70名増加している状況にあります。）

このような傾向にあることを前提に、子どもの姿や家庭の様子に「変化」が見られた今を好機と捉え、これまでの対応を改めて見直し、今後の対応を工夫してみてはいかがでしょうか。

教育センターには、「タブレットPCを活用したリモート授業により、不登校の我が子が前向きに学習に取り組む姿を見ることができて良かった。」との声も、保護者から寄せられています。

学校や家庭における子どもの状況を的確に把握して、理解を深め、追加配置が進んでいるSC（スクールカウンセラー）やSSW（スクールソーシャルワーカー）を積極的に活用するなど、関係機関と連携を図りながら、「個別最適な支援」を講じることで、より多くの子どもたちが、変化に対応したあゆみを進めることができるものと考えます。

教育センターといったとしても、学校教育相談員・学校支援コーディネーター・指導主事の総力をあげて、子どもたちに対する「個別最適な支援」の力となれるよう、努めてまいります。

基礎的・基本的な学習内容の定着と活用力の育成を目指して ～令和2年度佐倉市学習状況調査「到達度調査」より～

佐倉市では、毎年度、学習の定着状況を到達度調査し、市内の小・中学校の学習状況と現状を明らかにすることで、各学校の指導内容や指導方法、評価の工夫改善を進め、基礎的・基本的な学習内容の確実な定着とその活用する力の育成を目指しています。小学校の外国語の教科化に伴い、令和2年度から佐倉市学習状況調査にも小学校外国語が加わりました。

| 基礎的な学習内容 | | | | 知識・技能等を活用して課題を解決する力 | |
|----------------|-------------------|---------------|----------------|---------------------|-------------------|
| 国語A (小1～中3) | 算数・数学A (小1～中3) | 理科 (小3～中3) | 外国語 (小5～中3) | 国語B (小5～中3) | 算数・数学B (小5～中3) |

令和2年度は、一斉休校等がありましたので、調査時期・学年を変更いたしました。

| 学年 | 例年の調査 | 令和2年度の調査 |
|---------------|-------------|----------|
| 小学校1年生～中学校2年生 | 当該年度の1月 | 翌年度の4月 |
| 中学校3年生 | 当該年度の11～12月 | 調査中止 |

各教科の調査結果の概要は以下の通りです。なお、前年比について、国語、算数・数学、理科は中学校3年生を除いて比較しました。外国語については、中学校1・2年生で比較しました。

国語A 平均正答率 80.8%
(前年比 -1.9%)

○漢字の読みは概ね定着している。

▲漢字の書き、文法に課題がある。



国語B 平均正答率 75.2%
(前年比 +0.5%)

○自分の考えを制限された文字数で表現することは、概ねできている。

▲表現の言い換えなど内容理解に課題がある。

算数・数学A 平均正答率 83.0%
(前年比 +1.1%)

○基礎的な計算は概ね定着している。

▲長さ、体積の計測など活動を伴う学習の内容の正答率が下がっている。

▲比、一次関数に課題がある。



算数・数学B 平均正答率 65.7%
(前年比 +5.8%)

○必要な情報を読み取り、知識を活用することは概ねできている。

▲単位当たりの量、図形の活用に課題がある。

理科 平均正答率 75.1%
(前年比 -2.2%)

○基礎的な事物・現象については概ね理解している。

▲観察や実験が十分にできなかった内容について、理解に課題がある。



外国語 平均正答率 82.5%
(前年比 +3.3%)

○リスニングは全体的によくできている。
▲人称代名詞など文法の理解に課題がある。



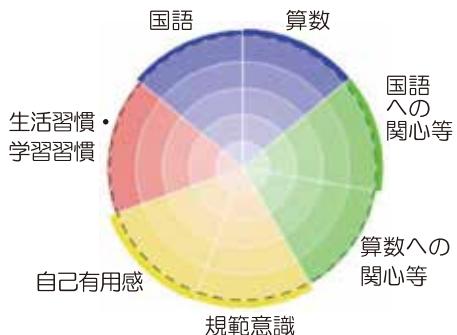
令和3年度 全国学力・学習状況調査

全国学力・学習状況調査の結果より、佐倉市の児童生徒の学習状況について全国と比較しながら、傾向の分析及び改善のヒントについてまとめました。

※チャートの点線…全国平均

小学校

分析 考察



改善の ヒント

【国語】

- 文章全体の構成を捉え、内容の中心となる事柄を把握すること
- ▲文章における**主語と述語の関係や修飾語と被修飾語の関係**を捉えること

【算数】

- データ**を二次元の表に**分類整理**すること
- ▲速さを求める**除法の式**と**商の意味**を理解すること

【質問紙調査】

- 自己有用感、規範意識、国語・外国語への関心
- ▲生活習慣、算数への関心

◇国語……言葉の特徴や使い方に関する事項では、文の中における**主語と述語との関係、修飾語と被修飾語との関係**を捉えるようにする。

◇算数……速さを求める式については、暗記するだけでなく、**具体的な場面**と関連付けながら、確実にできるようにする。

中学校

分析 考察



改善の ヒント

【国語】

- 話し合いの話題や方向を捉えて、**話す内容を考えること**
- ▲書いた文章を互いに読み合い、**文章の構成についての工夫を考えること**

【数学】

- 整式の**加法と減法の計算**
- ▲データの傾向を的確に捉え、判断理由を**数学的な表現**を用いて説明すること

【質問紙調査】

- 学習習慣、規範意識、数学への関心、地域への関心
- ▲自己有用感、国語への関心

◇国語……書くことでは、読み手の立場に立ち、自分が書いた文章について捉え直し、**分かりやすい文章に整える力を養う**。

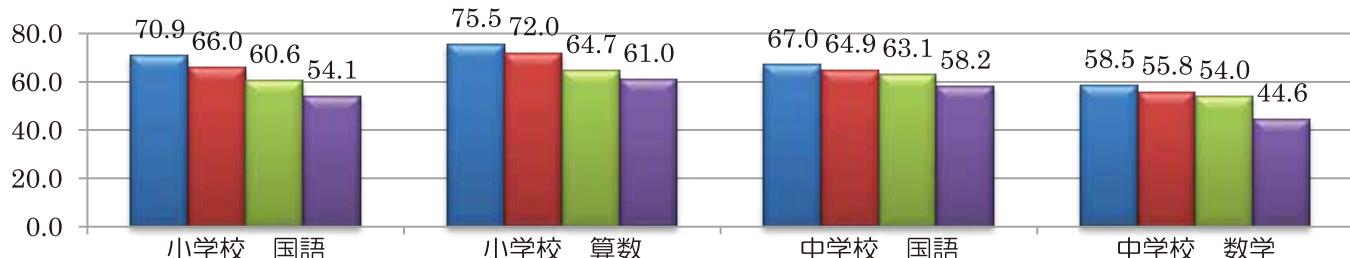
◇数学……データの活用において判断の理由を説明するために、**データの傾向を的確に捉える**ようにする。

児童生徒質問紙と学力のクロス集計より

「自分の思っていることや感じていることをきちんと言葉で表すことができますか。」の質問に対し、肯定的な回答（当てはまる・どちらかといえば当てはまる）をした児童生徒の方が正答率が高い傾向にありました。学習の場面に限らず、日常生活においても、自分の言葉で表現できる児童生徒を目指すことが、学力向上に繋がるのではないでしょか。



■当てはまる ■どちらかというと当てはまる ■どちらかというと当てはまらない ■当てはまらない



就学相談及び教育相談等と「適切な学びの場」としての特別支援学級

教育センターでは、1年間を通して、特別な支援を必要とする幼児児童生徒の「適切な学びの場」について、保護者や学校と共に考えるため、様々な相談を行っています。例えば、就学前児を対象とする就学相談、学齢児童生徒を対象とする発達相談及び教育相談等があります。具体的な内容をいくつか挙げると、以下のとおりとなります。



図1

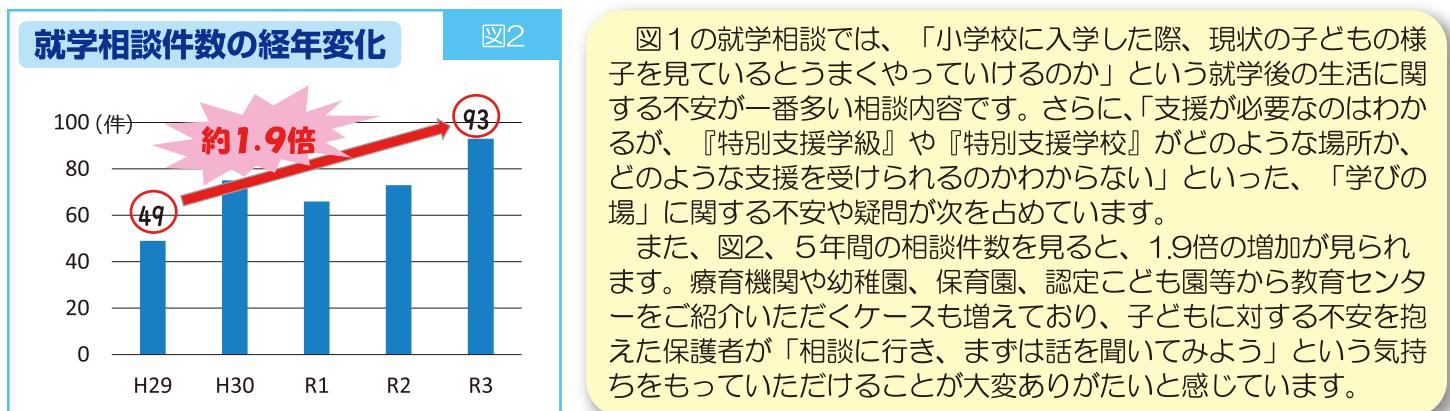
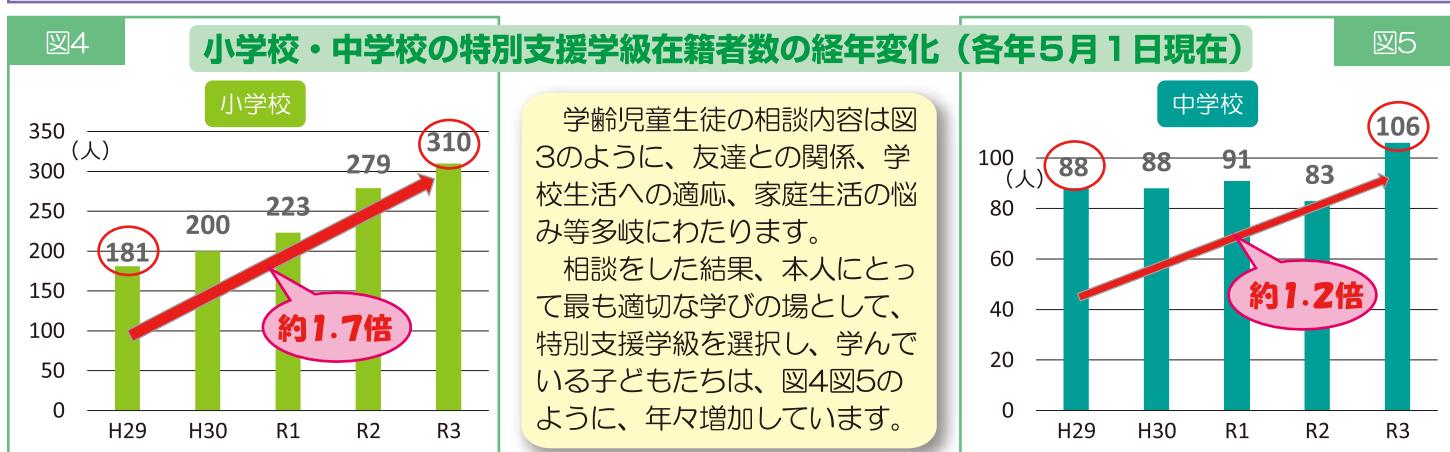


図1の就学相談では、「小学校に入学した際、現状の子どもの様子を見ているとうまくやっているのか」という就学後の生活に関する不安が一番多い相談内容です。さらに、「支援が必要なのはわかるが、『特別支援学級』や『特別支援学校』がどのような場所か、どのような支援を受けられるのかわからない」といった、「学びの場」に関する不安や疑問が次を占めています。

また、図2、5年間の相談件数を見ると、1.9倍の増加が見られます。療育機関や幼稚園、保育園、認定こども園等から教育センターを紹介いただくケースも増えており、子どもに対する不安を抱えた保護者が「相談に行き、まずは話を聞いてみよう」という気持ちをもっていただけることが大変ありがたいと感じています。



図3



学齢児童生徒の相談内容は図3のように、友達との関係、学校生活への適応、家庭生活の悩み等多岐にわたります。

相談をした結果、本人にとって最も適切な学びの場として、特別支援学級を選択し、学んでいる子どもたちは、図4図5のように、年々増加しています。

教育センターでは、様々な相談を受け、学校と連携しながら子どもにとって何が一番必要であるのかを考えています。各図から、保護者が子どもの発達に関して目を向け、相談へ足を運び、その結果、特別支援学級を適切な学びの場として選ぶケースも増えていることがわかります。また、就学後、改めて相談を行い、途中から特別支援学級へ転籍することにより、特別支援学級在籍児童生徒数が増えています。特に小学校でその傾向が顕著です。これらは、特別支援教育への意識の高まりやその必要性が広く伝わっている結果であると言えます。ただし、就学や転籍がゴールではなく、そこからも相談を積み重ね、学びの場の柔軟な見直しを行い、子どもたちの将来を見据えながら健やかな成長を見守っていくことが大切だと考えます。